

### 「ギリシア人」の境界 : 戦間期サロニカ のユダヤ人から考える

Murata, Nanako / 村田, 奈々子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

253

(終了ページ / End Page)

279

(発行年 / Year)

2012-01-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007760>

# 「ギリシア人」の境界

—— 戦間期サロニカのユダヤ人から考える ——

村 田 奈々子

## 1. はじめに

近代の国民国家は、歴史と文化を共有する同質な民族が、政治的に統一されたひとつの国家を持つことができるという原理に基づいて誕生した。しかしながら、多くの場合、国民国家の領域を示す国境線は人工的なものであり、国境線によって区切られた空間の内側には、国民国家がその構成要素として想定する、同質のひとつの民族とは異なる、独自の歴史と文化を持つ「よそ者」が含まれる場合がしばしばである。つまり、国民国家の多くは、「よそ者」をどのように扱うかという問題に直面する。「よそ者」を包摂するのか、あるいは排除するのか、という二つの選択肢のあいだで政策決定を行う必要に迫られることがある。

1912年の第一次バルカン戦争の結果、ギリシアは、オスマン帝国領マケドニアの都市サロニカ<sup>(1)</sup>を占領し、第二次バルカン戦争後のブカレスト講和条約(1913年8月)によって、これを自国領として正式に併合した<sup>(2)</sup>。サロニカは、帝国を代表的する商業・港湾都市だった。ギリシア人のみならず、ユダヤ教徒、イスラーム教徒、スラヴ系諸民族が共存したサロニカは、オスマン帝国の多民族性を体現した都市だった。これら共生する住民たちのなかでも、最大の割合を占めたのがユダヤ人である。併合当時のギリシアの統計によると、サロニカの総人口15万7,889人のうち、ギリシア人が3万6,956人だったのに対し、ユダヤ人人口は6万1,439人にのぼった<sup>(3)</sup>。

サロニカの併合は、ギリシアにとって新たな挑戦のはじまりだった。ギリシアは、国境内にある程度まとまった規模のユダヤ人マイノリティを、はじめて抱えることとなったからである。

1830年にオスマン帝国からの独立を果たしたギリシアでは、正教キリスト教徒であることがギリシア人であることと同一視される傾向にあった。19世紀を通して続けられた領土拡張運動の過程で、独立当初の国土にはほとんど見られなかった、ギリシア語以外のブルガリア語やセルビア語といったスラヴ系諸語や、ルーマニア語に近いヴラヒ語を母語とする人々も、ギリシア領内に含まれることになった。言語が民族を区別する指標とされるのが一般的だった当時、ブルガリア、セルビア、ルーマニアは、ギリシア領内に含まれることになったスラヴ語話者やヴラヒ語話者を自民族であると主張して、ギリシアの領土獲得の正当性に疑問を投げかけた。しかし、ギリシア・ナショナリズムの論理によれば、歴史的にギリシア文化が優位を占めてきたイスタンブルの世界総主教座に属する正教キリスト教信者である限りにおいて、何語を母語としようとも、彼らはギリシア人たりえたのである<sup>(4)</sup>。

ところが、サロニカのユダヤ人の場合は違った。母語がギリシア語でないのはもちろんだが、何よりも宗教の点から、ユダヤ人は、従来ギリシア国家が想定していた「ギリシア人」の境界の外側に存在していた。彼らが、国民国家ギリシアの成員として組み入れられるためには、何らかの操作が必要とされた。一方、多民族が共存するオスマン帝国の一構成民族から、突如として、ギリシア人を「主人」とする国民国家のマイノリティの地位に置かれたサロニカのユダヤ人は、新たな政治的枠組みの中で、ギリシア人ではない自らの特異性を再認識することになった。彼らは、国民国家ギリシアといかにつきあっていくかという問題に取り組むことになったのである。

本稿では、まず、ギリシアに併合される以前のサロニカのユダヤ人コミュニティの歴史をふりかえる。それから、戦間期サロニカのユダヤ人に対するギリシア側のアプローチと、それに対するユダヤ人の対応を四つの視点から見てゆく。第一に、ギリシアの法律におけるユダヤ人の位置付けについて。第二に、国民国家ギリシアへの対応をめぐるユダヤ人コミュニティ内部に生じた分裂について。第三に、ユダヤ人の法的地位とは別に、ギリシア国家の政策やギリシア社会に見られた反ユダヤ主義について。最後に、戦間期のユダヤ人の「ギリシア化」について。この四つである。

サロニカがギリシアに併合されてから、第二次世界大戦中のナチ党のドイツによるギリシア占領までの約30年にわたる、ギリシア国家と社会によるユダヤ人に対する包摂と排除の事例からは、ユダヤ人が、法制度上は「ギリシア国

民」とされながらも、現実には「ギリシア人」とは見なされなかったことが明らかになるだろう。ユダヤ人は、法律という手段だけでは、「ギリシア人」の境界の中に簡単に入り込むことは難しかった。そのような、ギリシア国家の政治と社会の状況に晒されながらも、サロニカのユダヤ人コミュニティは、一方的に受動的な立場に置かれていたわけではない。本稿の記述を通して、ユダヤ人コミュニティの分裂や言語的な同化の過程、あるいはギリシア人との平和的な共存を通して、彼らが自分たちの新しいアイデンティティ——「ギリシア国民」でありながらユダヤ人であるということ——とやかに折り合いをつけるかを模索していたのかが明らかになるだろう。サロニカのユダヤ人たちにとっての戦間期は、国民国家の中で生き抜く術を身につけるための試行錯誤の歴史だった。

## 2. サロニカ——バルカンの「イェルサレム」——

サロニカのユダヤ人の歴史は、16世紀初頭にさかのぼる。彼らの先祖は、イベリア半島出身のユダヤ人だった。

1492年、イベリア半島のイスラーム王朝ナスル朝がスペイン王国によって滅ぼされた。これによって、レコンキスタ（キリスト教徒による領土回復運動）が完成し、キリスト教徒による支配が始まった。ユダヤ人は、8世紀初頭からイベリア半島で続いた歴代のイスラーム王朝のもとで、「啓典の民」として保護され、政治や経済の分野で活躍しただけでなく、文化的にも繁栄を享受してきた。しかし、キリスト教徒支配者は、イスラーム教徒支配者とは違って、ユダヤ人に寛大ではなかった。ほどなく、イスラーム教徒だけでなく、ユダヤ人に対する追放令も発布された。ユダヤ人の中には、追放を逃れようとキリスト教に改宗する者もいた。その一方で、多くのユダヤ人が、新天地を求めてイベリア半島を離れたのである。

イベリア半島を後にしたユダヤ人が目指した土地のうちのひとつが、イスラーム教を奉じるオスマン帝国の支配領域だった。オスマン帝国は、王朝に対する忠誠を誓い、納税義務を果たす限りにおいて、ユダヤ人の信仰の自由を認めていた。1453年にイスタンブル（コンスタンティノープル）を征服し、さらに勢力を拡大しようとしていたオスマン帝国は、イベリア半島からのユダヤ人の到来を歓迎した。このようにして、帝国の各地にユダヤ人コミュニティが生ま

れた。その中でも首都イスタンブル、小アジア西海岸のイズミール、そしてバルカン半島のサロニカには、大規模なユダヤ人コミュニティが形成された。

イベリア半島からユダヤ人が移住する以前から、オスマン帝国領内には、ユダヤ人コミュニティが存在した。今日のギリシアに相当する領域には、数的規模ではイベリア半島からのユダヤ人にはるかに及ばないものの、少なくとも紀元2世紀まで遡ることのできるユダヤ人コミュニティがあった。彼らはロマニオト（ギリシア語でロマニオテス）という名称で知られ、ギリシア語を母語とした。15世紀初め以降、バイエルン王国から追放され、中東欧に広がったアシュケナジムと呼ばれるユダヤ人のうちの少数が、バルカン半島のオスマン帝国領にも移住した。これらのアシュケナジムに対し、イベリア半島出身のユダヤ人は、スファラディムという名称で区別される<sup>(5)</sup>。

サロニカは、バルカン半島のスファラディムのユダヤ人コミュニティの中心として栄えた。16世紀には、地中海地域の有力なユダヤ人都市として知られるようになった。サロニカに与えられた「バルカンのイェルサレム」<sup>(6)</sup>、あるいは「イスラエルの母」<sup>(7)</sup>という別称も、ユダヤ人世界全体にとってのサロニカの重要性を示唆しているのみならず、いかにこの都市で、ユダヤ人が中心的な役割を果たしていたのかを物語っている。ユダヤ人は、銀行家、貿易商、行商人、港湾運搬人、船員として、サロニカの経済、ひいては、オスマン帝国全体の経済活動にかかわっていた。17世紀初頭には、サロニカの全人口の約7割が、ユダヤ人によって占められていた<sup>(8)</sup>。

1912年にギリシアがサロニカを占領したとき、サロニカのユダヤ人コミュニティは、すでに400年にわたる歴史を持っていた。ギリシアによるサロニカの併合が現実味を帯びる状況の中で、ユダヤ人は強い反発を示した。その第一の理由は、併合が経済の停滞を招くと考えられたためである。国境線が引かれることによって、サロニカはその後背地を失うのみならず、オスマン帝国との経済的なつながりを断たれてしまうだろう。併合の結果、ユダヤ人に対するトルコ人の負債が償還されることなく未解決のままにされれば、多くのユダヤ人が破産に追い込まれることも予想された。さらにユダヤ人が危惧したのは、併合がもたらす政治的緊張が、経済活動に与える悪影響だった。エーゲ海へと開かれた、戦略的にも重要なこの都市を奪おうと、ブルガリアやセルビアといった周辺スラヴ諸国が、常にギリシアに圧力をかけ続けることが予想された。政治的不安定は、やはりユダヤ人の経済活動の妨げになると判断された<sup>(9)</sup>。

サロニカのギリシアへの併合にユダヤ人が反対したのは、経済活動に大きな支障が生じることが予測されたためばかりではない。ユダヤ人は、ギリシア国家において、自分たちがいかなる地位に置かれることになるのかを懸念したのである。オスマン帝国で享受していた諸権利や特権が制限されるのではないか。ギリシア政府は、ユダヤ人に対して信仰の自由を認めるだろうか。宗教を理由に差別されることはないだろうか。ギリシアへの併合は否応なくサロニカの「ギリシア化」を促進し、この都市の社会、経済、文化生活で、ユダヤ人がこれまで謳歌してきた優越的な立場が弱められてしまうのではないか。ユダヤ人の不安は募った<sup>(10)</sup>。

ユダヤ人には、サロニカのギリシア領への併合は、負の結果のみをもたらすと予想された。そこで、彼らは、サロニカを、オスマン帝国でもギリシアでもない、国際社会の管理下に置くことを考えた。彼らは、ベルリンに本部が置かれていたシオニスト機構<sup>(11)</sup>にこの案を提出して、機構が国際社会に働きかけるよう要請した。しかし、シオニスト機構はこれを却下した。この案に従えば、サロニカのユダヤ人が独立の、あるいは、自治的な地位を獲得することになる。それは、パレスチナに全ユダヤ人の国家を建設するという要求——シオニズム——の実現を阻害すると見なされたためだった<sup>(12)</sup>。

サロニカのユダヤ人が次に考えたのは、サロニカを首都とする政治的に中立な緩衝国を建設する案だった。そのような国家を設立することによって、サロニカで優位に立とうと野心を燃やすギリシア、ブルガリア、セルビア間の政治的緊張は緩和されるであろう、との主張であった。しかし、シオニスト機構は、上述と同じ理由でこの案も受け入れなかった<sup>(13)</sup>。1913年、ユダヤ人の抵抗も空しく、サロニカは正式にギリシア領となった。

### 3. ユダヤ人の包摂——ギリシアにおけるユダヤ人の法的地位——

上述のユダヤ人の心配は、少なくとも併合直後においては、杞憂に終わった。ギリシア国王コンスタンディノスは、首都アテネに次ぐ第二の都市となるサロニカのユダヤ人が、国家の経済にとって重要な役割を果たすことになるであろうことは十分に認識していた。1913年、サロニカのユダヤ人コミュニティ最高指導者（首席ラビ）と国王との面談において、国王は、ユダヤ人の従来の経済活動の継続と、ギリシア側の友好的態度を保証した。それに続いた公式発表

でも、国王は、ギリシアのユダヤ人が、宗教を理由として、ギリシア人の敵意の対象となることはないことを明言した<sup>(14)</sup>。

国王によるユダヤ人擁護の発言はあったものの、併合からしばらくの間、サロニカのユダヤ人の法的地位は不明瞭なままだった。ユダヤ人たちは、ギリシアにおける自分たちの地位を明確にしてくれるよう、積極的にギリシア議会に働きかけた。1920年7月の「ユダヤ人コミュニティに関する法 2456号」によって、ギリシアのユダヤ人コミュニティは、ようやく正式な定義を受け、それに伴う諸権利を与えられた。

これには、第一次世界大戦後のパリ講和会議で、マイノリティの諸権利を法律で保証するという考え方が支配的となったという背景がある。新たに誕生した東ヨーロッパ諸国には、この原則が強要された。ギリシアがユダヤ人に対する法律を制定したのも、この一連の世界的潮流の中に位置づけることができる<sup>(15)</sup>。

この法律は、概してユダヤ人に対して好意的なものだった。20世帯以上のユダヤ人家族が恒常的に暮らしており、かつ、シナゴグが機能している地区では、国王令によって、ユダヤ人コミュニティを設立することができると定められた。そのコミュニティは法人として認められることとなった。ユダヤ人コミュニティは、それまでの伝統や慣習を維持することが許された。コミュニティ内の最高意思決定機関としての議会が認められ、首席ラビとコミュニティ評議会がそれに対して責任を持つとされた。議会選挙では、これまでの財産基準が廃止されて、ギリシア人一般と同様に男子普通選挙の原則が適用されることになった。教育の分野では、従来からあったコミュニティ管理下の教育機関の存続が認められた。宗教的伝統についても、特別な措置が取られた。過ぎ越しの祭りのような宗教行事に必要なパンや砂糖、および宗教教育に必要な教材の輸入は免税とされた。ユダヤ人コミュニティは、日曜日ではなく、ユダヤ教の安息日である土曜日を休日とすることも許可された。学校では、歴史、地理、科学といった科目は、国語であるギリシア語で教えなければならなかったが、それ以外の科目は、それまで通り、母語であるラディーノ語（ユダヤ系スペイン語）、もしくはフランス語で教授することが認められた。商売上の取引でも、ギリシア語ができないユダヤ人は、会計簿をラディーノ語かフランス語で記載することが認められた<sup>(16)</sup>。

この法律は、ユダヤ人のこれまでの伝統と習慣の継続を認めると同時に、コ

コミュニティ内の議会では、男子普通選挙の原則を適用するといった、ギリシア側の近代的で寛容な姿勢を反映していた。これは、ユダヤ人を、ギリシア国家における単なる宗教マイノリティとして位置付け、彼らの文化的・宗教的伝統を尊重しようとしたものではない。注目すべきは、この法律が、ユダヤ人は、保護されるべきユダヤ教徒マイノリティでありながら、同時にギリシア国民であるとの認識を示している点である。これは、ギリシア国家における国籍・市民権の歴史からみた場合、画期的といえる。ギリシアがオスマン帝国からの独立を宣言して以来、20世紀初頭までに発布された六つ憲法（1822年、1823年、1827年、1844年、1864年、1911年）で、マイノリティが言及されることはなかった。しかも、先に述べたように、独立以来、正教キリスト教徒であることと、ギリシア人であることが同一視され、その傾向は20世紀初頭に一層強まっていた。そうしたなかで、ギリシア領内に居住する非キリスト教徒が、正教キリスト教徒であるギリシア人と同じく、国民としての諸権利を享受できるかどうかは、曖昧なままだったのである<sup>(17)</sup>。したがって、ギリシア国民としてユダヤ人の存在を記し、ユダヤ人をギリシア国家を構成する一員として包摂した、この法律の持つ意味は大きいと言えよう。

しかし、ギリシアが、リベラルで民主主義的な近代国家としての立場から、この法律を成立させたと考えるのは早計である。これは、「メガリ・イデア」<sup>(18)</sup>と呼ばれるイデオロギーに基づいた領土拡張運動を推進するための、予備的措置であったと考えるべきだろう。当時ギリシアが領有を目指していたオスマン帝国領には、ギリシア語を母語とする正教キリスト教徒だけでなく、さまざまな言語・宗教的背景を持つ民族が暮らしていた。したがって、国内のユダヤ人を厚遇することによって、ギリシアはマイノリティ政策に積極的な国家であることを示し、オスマン帝国解体後において、領土分割の鍵を握るヨーロッパ列強の信用をかちえ、その干渉を防ぐ必要があったのである。

実際、国民国家ギリシアにとって、正教キリスト教徒でもなく、ギリシア語話者でもないマイノリティは、招かれざる客だった。ギリシア人は、サロニカのユダヤ人たちがシオニズムを支持して、パレスチナに去ってくれることを望んでいた<sup>(19)</sup>。法2456号が施行される3年前の1917年に、ギリシアの外務大臣ニコラオス・ポリティス（Nikolaos Politis）が、パレスチナにユダヤ人国家を建設することに賛成を表明していたことがそのひとつの証左である<sup>(20)</sup>。それは、イギリスの外務大臣バルフォアが、将来的にユダヤ人の「ナショナル・

ホーム」をパレスチナに建設することをイギリスが支持することを明言した、いわゆる「バルフォア宣言」が出されるよりも五カ月前のことだった。ユダヤ人をギリシア国民と認める法律とは裏腹に、ユダヤ的要素を排除する傾向は、後述する1917年のサロニカ大火とその後の都市再建、および1923年の小アジアからのギリシア系難民流入後のギリシアの政治と社会のなかで、より顕著に表れることになる。

#### 4. ユダヤ人コミュニティの分裂—— 穏健派・共産主義者・シオニスト——

ギリシアという国家の枠組みの中で、ユダヤ人コミュニティの地位と権利は定められた。これに対して、サロニカのユダヤ人たちは、国民国家ギリシアに対して、どのような反応を示しただろうか。

戦間期のサロニカのユダヤ人たちが一枚岩であり、ギリシア国家のユダヤ人コミュニティに対する措置に対して、統一されたひとつの態度をとったと考えるのは間違いである。この時期のサロニカのユダヤ人コミュニティは、かつてないほど分裂の様相を示していた。その理由のひとつは、これまで維持されてきたコミュニティ内選挙での財産資格が廃止され、オスマン帝国時代からの裕福な名望家層の力が弱体化する一方で、より貧しい社会層のユダヤ人たちが政治に参加して、自分たちの意見を表明するようになったからである<sup>(21)</sup>。つまり富めるユダヤ人と貧しいユダヤ人の隔たりが、ユダヤ人コミュニティとしての団結を阻害したことになる。さらには、1923年に首席ラビのベンツィオン・ウジエル (Ben-Zion Uziel あるいは Bentzion Uziel) がサロニカを去り、1933年にツヴィ・コレツ (Zvi Koretz あるいは Tzevi Koretz) がベルリンからサロニカ入りして、首席ラビに就任するまでの十年間、サロニカのユダヤ人コミュニティの意見を調整して、コミュニティ全体を統括する最高責任者が不在だったことも理由としてあげられる<sup>(22)</sup>。

ユダヤ人コミュニティは、三つのグループに分裂した。第一のグループは、穏健派あるいは同化主義者と呼ばれ、ギリシア国家と協調することを主張した。経済的に比較的豊かな上流中産階級と中産階級の人々が、このグループの中核を形成した<sup>(23)</sup>。

このグループは、ギリシア・ナショナリズムと妥協し、ギリシア社会への同化を支持した。歴史家、著述家、そして教育家として知られたヨセフ・ネハマ

(Joseph Nehama) もこのグループに属した。彼は、古き良きオスマン時代を懐かしむのは時間の無駄であり、積極的にギリシア国家に協力する必要があると考えた。ギリシア・ユダヤ主義理論を提示し、ユダヤ人としてのアイデンティティを保持しながら、ギリシアへの愛国的態度を持つことは可能であると論じる者たちもいた。1928年には、穏健派のメンバーによって、「ユダヤ人同化主義者協会」が設立された。その目的は、「ユダヤ教の信仰と伝統、そしてユダヤ人の団結精神から遠ざかることなく、宗教の違いを超えて同胞（ギリシア人）国民とまったく同じ感情をサロニカのユダヤ人のあいだに醸成すること」だった<sup>(24)</sup>。穏健派は、ユダヤ人に対して、自分たちの立場を主張するだけではなかった。彼らは、ギリシア当局およびギリシア世論に対しても、ギリシアに住むユダヤ人は、身も心もギリシア国家と一体であることを望んでいると説得することに躍起になった<sup>(25)</sup>。

第二のグループは、共産主義者たちである。1918年に設立されたギリシア共産党には、多くのユダヤ人が名を連ねていた<sup>(26)</sup>。「ユダヤ人＝強欲な大商人」というステレオタイプは、サロニカのユダヤ人には当てはまらない。オスマン帝国支配末期のサロニカのユダヤ人の90%が、取るに足らない職人や、その日暮らしの日雇い仕事に従事する労働者と見なされる階層に属していた<sup>(27)</sup>。また、1914年にマルクスとエンゲルスの『共産党宣言』が彼らの母語であるラディーノ語に翻訳、出版されたことによって、若いユダヤ人知識人のあいだで共産主義に共鳴する者たちが増加した<sup>(28)</sup>。そのため、共産主義者のグループは大きな支持を集めることが予想された。実際、1926年のコミュニティ選挙においては、全投票数の39%を獲得する大躍進を見せた<sup>(29)</sup>。

ただし、サロニカのユダヤ人労働者が支持を表明したのは、共産主義よりもシオニズムだった。シオニズムを標榜するユダヤ人たちが、第三の有力なグループを形成したのである。このグループの中核となったのは、穏健派と同様の、上流中産階級および中産階級の人々だった。ユダヤ教の伝統を全面的に否定する共産主義に、多くのユダヤ人は抵抗を覚えた。シオニストたちは、共産主義者とは異なり、労働者の福利厚生を声高に主張することはなかった。しかし、ギリシア文化が優越する国家の中で、ユダヤ文化を擁護し、ユダヤ人コミュニティに利益となる社会的、政治的行動をとる存在と見なされたのである<sup>(30)</sup>。

サロニカにおいて、シオニズムは、ギリシア併合後、急速に影響力を拡大した。注意しなくてはならないのは、この場合のシオニズムとは、ユダヤ民族の

国家を建設することで、離散ユダヤ人たちへの迫害や、彼らが現実に暮らしている国家への同化の問題を解決しようとする運動を意味しなかったという点である。戦間期サロニカのシオニズムは、ギリシア・ナショナリズムに対抗するイデオロギーとして機能していた。ギリシア国家のなかで、ユダヤ人住民の民族としての結束力を強め、その存在を擁護するための拠り所として、シオニズムは受け入れられたのである。サロニカのユダヤ人たちは、サロニカを去り、1917年にイギリスの委任統治領としてオスマン帝国から切り取られたパレスチナに移住することが、自分たちにとって最善の選択とは考えなかった。彼らにとっての大前提は、自分たちはこれからもサロニカに住み続けるということだった<sup>(31)</sup>。彼らにとっての故郷は、パレスチナではなく、あくまでサロニカだったのである<sup>(32)</sup>。サロニカのユダヤ人のシオニズムは、よりローカルな問題、すなわちギリシア国家内のユダヤ人が直面する問題の解決に関心を向けた、「ディアスポラ・ナショナリズム」と呼ぶべきものだった<sup>(33)</sup>。

穏健派とシオニストは、共産主義者勢力の抑え込みのためには共闘した。しかしながら、ギリシア国家の枠組みのなかで、ユダヤ教の文化と伝統を重んじ、ユダヤ民族としてのアイデンティティの堅持を強調するシオニストたちの立場は、ギリシア国家と協調し、ギリシア社会への同化もいとわないとする穏健派の立場と対立した。加えて、シオニストによる民族としてのユダヤ人意識の涵養は、ギリシア民族との違いを際立たせる結果を招いた。このため、ギリシア社会は、シオニストを最も危険な勢力と見なした。世論は、ユダヤ人コミュニティ内のシオニストと共産主義者の違いを度外視して、ユダヤ人シオニスト指導者たちを、反国家的であり、ギリシアを脅かす共産主義、および世界主義勢力の代表者格に位置づけることさえしたのである<sup>(34)</sup>。

戦間期サロニカのユダヤ人コミュニティは、国民国家のマイノリティになったことによって、一致団結してギリシア当局にコミュニティとしての立場を表明することはなかった。むしろ、集団の在り方をめぐって、穏健派、シオニスト、共産主義者という三つのグループに分裂し、対立が深まった。しかし、コミュニティ内部のこれら三つのグループが共有していた事実がある。それは、三者ともにギリシア政治の影響から逃れることができなかったという点である。ユダヤ人コミュニティ内部の分裂は、ギリシア政治の大局からみた場合、些細な出来事に過ぎず、ユダヤ人たちは、戦間期のギリシア政治の大波に晒されながら、コミュニティ内部で、それぞれの立場を主張するしかない存在であった。

## 5. ユダヤ人の排除 — 戦間期のギリシア政治と社会 —

### (1) ヴェニゼロスの政治

戦間期のギリシア政治は、エレフセリオス・ヴェニゼロス (Eleftherios Venizelos) を抜きに語ることはできない。彼は、国際政治の舞台で知られた数少ないギリシア人政治家の一人である。ヴェニゼロスは、自由民主主義を旗印にした政党「自由党」の党首として君臨した<sup>(35)</sup>。

サラニカをギリシア軍が占領した1912年当時、あるユダヤ人は、ヴェニゼロスを、ギリシアにとって潜在的な価値のあるユダヤ人に敬意を払う「民族的・宗教的偏見のない素晴らしい人物」と評した<sup>(36)</sup>。先に述べた、ユダヤ人の地位と諸権利に関する法2456号の制定は、彼の政権のもとで行われた。ただし、ヴェニゼロス政権の実態は、極端なまでのギリシア・ナショナリズムに支えられた、反ユダヤ的なものだった。

その第一の例は、1917年のサラニカ大火後の都市再建計画に見出される。8月5日から6日にかけて、サラニカの四分の三を焼き尽くしたこの火災で、最大の被害を受けたのはユダヤ人たちだった。8,000から9,500の建物が焼失し、7万人以上が家を失ったが、家を失った者のうち、4万人から5万人がユダヤ人だった。ユダヤ人コミュニティの37のシナゴグのうち32が焼け落ちた。世界でも名高かったユダヤ図書館、多くの学校、社交場、オフィスも灰燼に帰した<sup>(37)</sup>。この大火によって、オスマン帝国支配期からのサラニカのオリエンタルな景観は永遠に失われたのである。

ヴェニゼロス政府は、この大火により、サラニカがギリシア国家にふさわしい新たな都市として再生する好機が与えられたと見なした。ヴェニゼロスは、この大火を「神の摂理の贈り物」<sup>(38)</sup>と呼び、サラニカの中心部にあったユダヤ人コミュニティをギリシア当局の管理下に置いて、ユダヤ人を周辺部に追いやったのである。そして、戦間期をとおして、「ギリシア的」な都市景観をもつ新たなサラニカの建設を続けた。シナゴグやモスクがあった場所にはキリスト教の教会の建設が計画され、木造家屋と狭く入り組んだ小道があった場所には、石造りの大きな建物と幅の広い大通りがつくられることになった。サラニカの再建は、20世紀初頭のヨーロッパ都市計画の最初の大事業のひとつに数えられる。

都市計画の主要目標は、これまでユダヤ人コミュニティの核であったサロニカの中心部から、ユダヤ的な特徴を消し去り、ギリシア当局が管理する領域を確保することであった。大火後、政府は、ユダヤ人の反対にもかかわらず、彼らの土地を収用し売却した。しかも、金銭的補償はなされなかった<sup>(39)</sup>。その後のユダヤ人被災者に対する扱ひも冷淡なものだった。政府は、ギリシア人被災者に、優先的に援助の手を差し伸べた。ユダヤ人被災者は、ギリシア政府ではなく、国際的なユダヤ人人道組織をあてにできるだろうというのがその理由だった<sup>(40)</sup>。

1917年の大火と、それに続いたギリシア政府主導の都市再建によって、サロニカの中心部を占めていたユダヤ人コミュニティは、かつての活気を取り戻すことはできず、寂れていくばかりだった。さらには、自分たちはギリシア国家から、公平に扱われていないという怒りの感情——1920年の法2456号の制定でいくらかおさまったものの——を生み出した<sup>(41)</sup>。

ヴェニゼロス政権の反ユダヤ的性格を示す第二の例としては、政府がギリシア人難民を積極的にサロニカに定住させ、この町のギリシア化を推進したことが挙げられる。

1922年、「メガリ・イデア」の最終段階として小アジアへの領土拡張を目指したギリシア軍は、トルコ軍に大敗を喫した。翌年締結されたローザンヌ条約によって、ギリシアとトルコの間で強制的な住民交換が実施された。その結果、およそ120万人の正教キリスト教徒が、難民として小アジアや東トラキアからギリシアに流入した<sup>(42)</sup>。

ヴェニゼロスは、難民の流入が、サロニカを含めたギリシア領マケドニア全体を、文字通り「ギリシア化」する好機であることを見逃さなかった。「メガリ・イデア」を遂行して領土を拡張することが不可能となった現実を前にして、ギリシアは、すでに自国領として国際的に承認された土地を、未来永劫、自分たちのものとする必要に迫られた。特に、わずか10年前にギリシアが併合したマケドニアと西トラキアのギリシア化は急務とされた。なぜなら、ブルガリアがそれらの土地を虎視眈々と狙っており、機会があれば、すぐにも行動に移るだろうと考えられていたからである。ヴェニゼロスが1922年に述べているように、「より広大なギリシア（を実現しようとする夢）が潰えた今、マケドニアと西トラキアが、政治的な意味においてだけでなく、民族的に見てもギリシア人の土地となったときはじめて、偉大なるギリシアの国境を確実なもの

にできる」のだった<sup>(43)</sup>。難民のマケドニアへの定住の推進は、そのためのひとつの手段だった。そして、ギリシア政府の難民への配慮は、サロニカのユダヤ人を、必然的に周辺的な地位に追いやる結果をもたらした<sup>(44)</sup>。

難民の流入はサロニカの人口構成を激変させた。サロニカでは、1913年のギリシアによる併合後も、ユダヤ人が最大の人口比率を占めていた。そのサロニカに、10万人から15万人の難民が流入した<sup>(45)</sup>。1926年になると、ギリシア人が80%、ユダヤ人が15~20%と、人口比率が逆転した<sup>(46)</sup>。ギリシア人の数的優位は確定的となり、ユダヤ人の都市としてのサロニカは、過去のものとなりつつあった。

数的に優位に立つとともに、難民たちは、経済的にもギリシア当局から優遇された。ヴェニゼロス政府は、彼らにさまざまな特権を与えることを通して、サロニカのギリシア化を推進した。さまざまな職場でユダヤ人が解雇され、代わりに難民が採用された。ユダヤ人の店先で、難民が商売することが許可された。日曜休業が法制化され、ユダヤ人もその遵守が強要された。その結果、彼らは、ユダヤ教の安息日である土曜日と、キリスト教の安息日である日曜日の週二回、商売ができなくなった。ギリシア人難民は、日曜日だけ休業し、残りの6日間は商売に従事することができた。ヴェニゼロス政府は、法の前の平等を理由に、この法律を正当化した。しかし、この法律は、明らかに、ユダヤ人を犠牲にして、ギリシア人難民を経済的に支援するための施策だった<sup>(47)</sup>。

難民に対する優遇策は、以前からギリシアに住んでいたギリシア人と難民との間にも軋轢を生じさせた。だが、ヴェニゼロスが、ギリシア人難民に敵対的な存在として名ざししたのは、ユダヤ人だった。あるユダヤ人は、以下のように回想している。

町 [サロニカ] にやってきた新たなギリシア人たちは、多くの特権を与えられた。たとえば、彼らは、ユダヤ人の経営する商店の店先で、自分たちの商品を売ることを許されていた。彼らは税金や手数料を免除されていたし、家賃やその他の出費の支払いも免除されていたので、ユダヤ人商人にとっては手ごわい競争相手だった。ユダヤ人は、抗議することもなかったし、むしろ彼らの救済のために金銭的援助をした。にもかかわらず、ヴェニゼロスは、「ユダヤ人は難民を心から歓迎していない」と不満をもらしたのだ<sup>(48)</sup>。

ユダヤ人は、経済力ばかりでなく、政治力も抑え込まれた。難民が流入する以前は、ユダヤ人もギリシア人も区別なく、同じ選挙区で同じ候補者を対象に投票していた。しかし、1923年には、ヴェニゼロス政府によって、ユダヤ人だけの別個の選挙区が作られた。愛国心を欠いたユダヤ人が、ギリシアの未来に不釣り合いな影響力をふるうのを食い止めなければならないという理由からだった。ユダヤ人をギリシア政治の主流から外し、孤立させようとする意図は明らかだった<sup>(49)</sup>。

ヴェニゼロスは、選挙ではさほどの影響力を持たなかった共産党に対しても、過度の敵意を示した。それは、共産党員にユダヤ人が占める割合が高かったことと無縁ではない。さらに、1929年には、既存の政治社会体制に対して異議を唱え、自説を表明する権利を阻止する特別法が制定された。このとき、ユダヤ人コミュニティは、自分たちが取り締まりの標的にされているのだと感じた<sup>(50)</sup>。

難民の流入を契機に、1917年の大火後から続いていた、サロニカの空間的、視覚的なギリシア化もさらに推進された。公共の標識はギリシア語によるとされ、ラディーノ語、あるいは、ヘブライ語で表記されることは禁止された<sup>(51)</sup>。1929年には、ヴェニゼロス政府によって、ユダヤ人コミュニティが所有する土地——その大半が墓地——を、難民の定住地とすることが定められた。この決定はさらに、ユダヤ人墓地を、サロニカ大学の土地として収用する計画にまで発展した<sup>(52)</sup>。

ヴェニゼロスは、ユダヤ人は、他のギリシア国民同様の自由と、ギリシア国民としての諸権利を持つと公言していた。しかし、彼は、サロニカのギリシアへの併合に、かつてユダヤ人が強く反発したことを、決して忘れていなかった。ヴェニゼロスは、ユダヤ人がギリシアを去ることを期待して、パレスチナにユダヤ人国家を建設するシオニズム運動を支持していた<sup>(53)</sup>。ヴェニゼロスは、ユダヤ人を信用せず、ギリシア国家を脅かす存在、排除されるべき危険分子と見なしていたのである。1934年のインタビューに、その姿勢が明らかに読み取れる。

ギリシア人は、ユダヤ人がギリシアの政治に影響を及ぼすことを望んでいない。[中略] サロニカのユダヤ人は、ユダヤ民族の政策に従っている。彼らはギリシア人ではないし、そのようにも感じていない。だから、彼ら

はギリシアの問題に首を突っ込むべきではないのだ。[中略] サロニカのユダヤ人は、ギリシア愛国主義者ではなく、ユダヤ愛国主義者である。彼らは、私たちより、ずっとトルコ人に近い。[中略] 私は、ユダヤ人がギリシアの政治に影響を及ぼすことを許さないであろう<sup>(54)</sup>。

## (2) ギリシア社会と反ユダヤ主義

反ユダヤ主義の姿勢は、ヴェニゼロスの政治だけでなく、メディアやギリシア人一般にも見られた。法律の上では、ギリシア国民と規定されたユダヤ人だったが、正教キリスト教徒とギリシア人が同一視される状況において、ユダヤ人は、決して「ギリシア人」にはなれない「よそ者」と認識されていた。

戦間期のメディアは、従来からのステレオタイプとしてのユダヤ人像——宗教に対して狂信的である一方、臆病で、自分の苦難や災難をつねに大げさに言いふらし、最も悪いことには、ギリシア語を学ぶことを拒否し続ける人々——を流布し続けた<sup>(55)</sup>。1928年には、ユダヤ人による世界征服計画書という触れ込みで、世界中に流布した『シオン賢者の議定書』がギリシア語に翻訳され、ギリシア人にも広く読まれた<sup>(56)</sup>。愛国主義的な新聞『マケドニア』は、この『議定書』が、「ヘレニズムに対する、ユダヤ人の永遠なる嫌悪」を表明しているとし、サロニカのユダヤ人も、ギリシアのあらゆる国家組織を乗っ取ることをたくらんでいるのだと宣伝した。『マケドニア』は、「彼ら [サロニカのユダヤ人] は、我々 [ギリシア人たち] と同じ利益に浴し、同じ期待を持つことによって、ギリシア人としての意識を獲得しなくてはならない。さもなければ、他の場所に住み処をみつけるがよい。なぜなら、テッサロニキ [サロニカのギリシア名] は、ギリシア人を名乗ってはいるものの、実際は国にとって最悪の敵であるような人々を懐に抱いて、乳を与えるわけにはいかないのだから」と述べた<sup>(57)</sup>。

ユダヤ人を、ギリシア国家にとっての「よそ者」あるいは「危険分子」と見なす反ユダヤ的言説は、サロニカを含むマケドニアが、将来、ギリシア領から奪われるのではないかというギリシア人の不安を背景に、真実味を帯びた。ギリシア領マケドニアは、ギリシアに併合されてまだ間もなく、しかも、前述のように、ブルガリアがその獲得の機会を狙っていた。正教キリスト教徒ではないユダヤ人、しかも併合時に抵抗姿勢を見せた彼らが、マケドニアの中心都市サロニカに居座っていることは、一般のギリシア人の不安を煽った。さらには、

国際コミンテルンが、独立マケドニア国家の建設——それはギリシア領からのマケドニア割譲を意味した——を主唱し、ギリシア共産党がその路線に追随していたことも、ユダヤ人のギリシア国家への忠誠心を疑う理由となった<sup>(58)</sup>。先に述べたように、ギリシア共産党に占めるユダヤ人党員の割合は高かった。このため、ギリシア人ナショナリストの言説では、ユダヤ人全体が共産主義者と同一視され、「ギリシア民族の裏切り者」とされたのである。

さらに、ユダヤ人は、上述のギリシア人難民のスケープゴートとされた。難民は、以前からギリシアに住むギリシア人の差別に晒されており、ギリシア社会にスムーズに同化できたわけではなかった。難民たちが、小アジアから「ギリシア人」として移送されたときの基準は、「正教キリスト教徒」であることだった。したがって、難民の中には、トルコ語を母語とする者も含まれていた。彼らが、ギリシア語を話せるか話せないかは問題とはされなかった。難民は、正教キリスト教徒であるという点において、ギリシア王国のギリシア人と同格であった。したがって、宗教を盾にし、ユダヤ教の「他者性」を過度に強調することによって、自らの「ギリシア性」を際立たせ、ギリシア国家の「正当な」国民であることを誇示しようとしたのである。従来からのギリシア人住民よりも、むしろ新参者のギリシア人難民によって、ユダヤ人はより「よそ者」として位置づけられ、周縁化させられることとなった。1927年にサロニカで愛国的組織『ギリシア民族同盟』が設立された時、数千名にのぼったその会員のほとんどは難民であった<sup>(59)</sup>。

サロニカのユダヤ人居住区焼き討ち事件「キャンベル暴動」も、そのような風潮を背景に勃発した。1931年6月20日から24日まで、新聞『マケドニア』は、サロニカのユダヤ人を会員とするマカバイ・スポーツ機構<sup>(60)</sup>はブルガリア人愛国主義者と手を結んでいると激しく非難し、反ユダヤ・キャンペーンを展開した。『マケドニア』によれば、マカバイ・スポーツ機構の会員が、ブルガリア愛国主義者会議——会議では、ギリシアがサロニカを含むギリシア領マケドニア地域を支配することを否定し、マケドニアの自治が決議された——に出席したというのである<sup>(61)</sup>。

このキャンペーンに呼応して、6月24日、ギリシア人群众は、マカバイ・スポーツ機構の事務所のみならず、ユダヤ人の住宅やシナゴグに投石した。当局がこの事件の鎮静化に向かったのは、1時間後のことで、すでに首謀者たちは去っていた。ユダヤ人コミュニティは、治安対策の強化を願い出たが、政

府は、事態を深刻には受け止めなかった。その結果、事態はさらに悪化した。サロニカのメディアばかりか、アテネのメディアも、反ユダヤ宣伝を始めた。「ユダヤ人はサロニカを出ていけ」という標語が貼られた。群衆は、「ギリシアで金儲けをするよそ者であり、共産主義者とコミタジ [ブルガリア人兵士] と手を組む」ユダヤ人の追放を求めてデモを行った。群衆の一部は、サロニカの街中で、ユダヤ人の所有する建物に印をつけて回った<sup>(62)</sup>。そして、6月29日、220世帯ほどの貧しいユダヤ人が移り住んでいたキャンベル地区に、『ギリシア民族同盟』の難民を中心とした約2,000人が押し寄せ、彼らの住宅と商店に放火した。事態は、サロニカの他のユダヤ人地区にも飛び火した。複数のシナゴグが包囲され、家が焼かれ、略奪された<sup>(63)</sup>。

この事件は、反ユダヤ主義を背景とした大規模な暴動を経験したことのないギリシア社会に、大きな衝撃を与えた。同じギリシア国民として、ユダヤ人とギリシア人との溝を埋める努力が必要であるとの意見も見られた。しかし、それは一過性のものに過ぎなかった。翌1932年に行われた裁判で、暴動の首謀者たちは無罪とされた。首謀者たちが放火したのは事実だが、彼らの行動は愛国主義に突き動かされたものであり、ユダヤ人が祖国の脅威であると真剣に憂いた末のことだったのだから、罰せられるべきでない、裁判所は結論づけたのである。暴動の黒幕の『ギリシア民族同盟』も、解散を言い渡されることはなかった<sup>(64)</sup>。

サロニカのユダヤ人にとって、この暴動は、大きな精神的打撃だった。彼らのうち、少数の者は、この事件をきっかけにギリシアを去ることを決意した。この事件によって、ギリシア国籍があろうとなかろうと、法制度がどのようなものであろうと、ギリシア人は、ユダヤ人を「ギリシア人」と見なすことはない、「ギリシア人になれる」とも信じていないということが明らかになった<sup>(65)</sup>。

サロニカのユダヤ人は、このようにして周縁的な地位に追いやられていった。ギリシア・ナショナリズムの論理では、小アジアや東トラキアで暮らしてきた正教キリスト教徒のほうが、400年以上にわたってサロニカに繁栄をもたらしたユダヤ人より、より「ギリシア国民」たるにふさわしい存在だと見なされたのである。

### (3) メタクサス政権とユダヤ人

1936年、ギリシアでは、ヒトラーを敬愛するイオアンニス・メタクサス(Ioannis Metaxas) 将軍による独裁が始まった。奇妙なことだが、メタクサス政権期(1936-1941年)よりも、それに先行したヴェニゼロス時代のほうが、明らかに反ユダヤ主義的な政治がおこなわれていた。ナチ党のドイツによるギリシア占領直前のメタクサス政権期が、サロニカのユダヤ人にとっては、最も平穏な時代だった。

メタクサスは、左翼勢力を弱体化させるために、秘密警察を駆使した共産主義者の逮捕、監禁など様々な強硬手段をとったものの、ユダヤ人を敵対視することはなかった。1933年にサロニカの首席ラビに就任したツヴィ・コレツ<sup>(66)</sup>と、ギリシア国王、そしてメタクサスの関係も良好だった。メタクサスは、「キリスト教徒でない集団も十分に尊重されなければならない」と強調していた<sup>(67)</sup>。ユダヤ系の新聞に対しヒトラー批判を禁じ、ラディーノ語に代わってギリシア語の使用を強要したものの、一方では、新聞『マケドニア』が反ユダヤ主義を扇動する記事を書くことをやめさせた。『ギリシア民族同盟』を解散させる手段も講じた。サロニカのユダヤ人は、メタクサスは国内のユダヤ人問題に関して中立、あるいはユダヤ人支持であるとすら考えた。しかし、実際のところ、メタクサスは、ユダヤ人保護に特別の関心を払っていたわけではない。メタクサスも、ヴェニゼロスと同様、ギリシア・ナショナリズムに突き動かされていた政治家だった。彼は、当時のギリシアを、古代と中世ビザンツにつづく、「第三の偉大なるギリシア文明」——「ドイツ第三帝国」を意識していたことは明らかである——の段階にあるとした。メタクサスによると、それは、古代の洗練された知性と中世の正教への敬虔な信仰心が融合した時代であった。約800万の人口を擁するギリシア国家に、ユダヤ人を含めたわずかに25万人の非正教キリスト教徒がいることは、彼にとって大きな問題ではなかった。彼は、ユダヤ人は無視できる存在と見なしていたのである<sup>(68)</sup>。

## 6. 揺らぐ境界——言語的同化と共生の継続——

反ユダヤ主義の言説は、サロニカのユダヤ人はギリシア民族の敵であると宣伝し、キャンベル暴動のような、ギリシア人による反ユダヤの実力行使も引き

起こした。それに対し、ユダヤ人コミュニティが、ギリシア当局に対して公然と敵対的な行動をおこすことはなかった。メディアの論調とは違って、ユダヤ人が、かたくなにギリシア社会への同化を拒否しつづけたわけでもなかった。

確かに、宗教的観点からすれば、ユダヤ教徒である彼らは、正教キリスト教徒ギリシア人にとって「よそ者」に違いなかった。一方で、言語的観点も、同化の度合いを見極める尺度と考えられていた。ギリシア語の習得という点から見た場合、サロニカのユダヤ人は、急速にギリシア社会に同化していったといえる。

ユダヤ人コミュニティの中では、ギリシア語の習得と同化の関連がさかんに議論された。言語的にギリシア化することは、キリスト教に改宗することを意味するのではないか？ ギリシア語を学ぶことは、ユダヤ人アイデンティティを放棄することにつながらないだろうか？<sup>(69)</sup>

穏健派のユダヤ人たちは、自分たちがギリシア国家の中で生きるためには、ギリシア語を学ぶことは不可欠だと考えた。それに対して、シオニストは、ギリシア語の使用に反対した。ユダヤ人のメディアでも意見は分かれ、戦間期には激論が繰り広げられた<sup>(70)</sup>。ただし、実際のところ、シオニストのユダヤ人たちは、ギリシア語習得に背を向け続けたわけではなかった。彼らはより現実的だった。ギリシア語を習得することは、ギリシア国民としての諸権利や義務——一定レベル以上の職業の獲得や徴兵等——を遂行するためには必要不可欠と考えていた。したがって、学校では、ギリシア語よりもヘブライ語とユダヤ人の歴史の学習に、より多くの時間をさくべきだと主張しつつ、ギリシア語学習そのものは否定せず、むしろ奨励した。さらに、成人に対しては、社交クラブでギリシア語の夜間学校を開催するなどして、ユダヤ人に広くギリシア語が学ばれるような環境が整えられた<sup>(71)</sup>。

1920年代後半までには、ユダヤ人の若い世代の大半は、ラディーノ語とギリシア語の二言語を操るようになった。1930年代になると、知識人階級はフランス語を好み、シオニストはヘブライ語の必要性を強調してはいたものの、中産階級の若い世代では、ギリシア語が第一言語として使用されるようになった<sup>(72)</sup>。シオニストの週刊誌『ユダヤ・ルネッサンス』も、1932年3月17日号から、ギリシア語で書かれた記事を最終頁に掲載しはじめた。ギリシア語しか理解できない若い世代に対する配慮がその背景にあった<sup>(73)</sup>。ある者はこう主張した。「私個人としては、この考え〔ラディーノ語の雑誌がギリシア語の記

事も掲載すること]は悪くないと思う。なぜなら、物事は移り変わっており、そのうちに、ラディーノ語を読める者たちは少なくなるだろう。若い世代は、ギリシア語の新聞のほうを読んでいるし、学校では、ラディーノ語はもはや教えられていないのだから<sup>(74)</sup>。もちろん、併合からわずか20年で、サロニカのユダヤ人コミュニティが言語的に完全にギリシア化したわけではない。年齢が上の者ほど、言語の習得は困難であり、ギリシア語が主流となっていく日常生活で、支障をきたすこともたびたびだった<sup>(75)</sup>。

ギリシア文化へのユダヤ人の同化は、言語の習得にとどまらなかった。レンベティカと呼ばれる、小アジアからの難民たちによって生まれた音楽の分野でも、ユダヤ人が活躍した。社会の負け犬たちを主題にした、東方と西方の音楽が混合したレンベティカに、スペイン系ユダヤ人の音楽的伝統も溶け込んでいったのである<sup>(76)</sup>。

さらに言うなら、反ユダヤ主義のもと、ギリシア人から敵視される一方で、サロニカのユダヤ人が、日常生活では、かつてのオスマン時代と同様、ギリシア人と平和的に共生していた事実も指摘すべきだろう。ユダヤ人が経営する雑貨屋には、ユダヤ人もギリシア人も買い物に訪れた。通りでは、ギリシア人の子供とユダヤ人の子供が一緒に遊んでいた。ユダヤ人とギリシア人の双方を会員とする職業別組合や、ビジネスマンたちの社交クラブも存続した。1941年、ナチ党のドイツがギリシアを占領しても、ユダヤ人を排除することなく受け入れていたクラブもあった。ユダヤ人とギリシア人との間の結婚もみられた。戦間期には、少なくとも、78名のユダヤ人（ほとんどが女性）から、正教キリスト教徒と結婚するとの理由で、改宗の申し出があった。かつては、改宗によって社会的制裁が加えられることも珍しくなかった。しかし、1930年代末には、そのような懸念も、以前ほど強くはなくなっていた<sup>(77)</sup>。

ユダヤ人コミュニティは、穏健派、シオニスト、そして共産主義者に分裂していた。ギリシア人による反ユダヤ主義の扇動にもさらされた。しかし、彼らに共通していたのは、サロニカが彼らの故郷であり、住み続けるべき土地であるという思いだった。戦間期を通じて、国民国家という空間を生きたユダヤ人のアイデンティティも、確実に変化しつつあった。正教キリスト教徒によって独占されていた「ギリシア人」の境界は、揺らぎはじめていた。「真のギリシア人」にはなれないと見なされようと、ユダヤ人たちは、小アジアからの難民と同様、ギリシアを Μητέρα Ελλάδα（母なるギリシア）と認識していったので

ある。

## 7. おわりに

サロニカのユダヤ人コミュニティが、第二次世界大戦後、さらなるギリシア化を遂げたのか、あるいは、ギリシア国民としてユダヤ文化を開花させていったのかを語ることはできない。戦後、サロニカには、ユダヤ人コミュニティと呼べる社会的な空間を構成するほどのユダヤ人は、残っていなかったからである。

1941年4月、ナチ党のドイツがギリシアを占領した。1942年3月、サロニカのユダヤ人のアウシュビッツの強制収容所への移送が開始された。ドイツ側の記録によると、サロニカからは、45,000人のユダヤ人がアウシュビッツに送られた。サロニカのユダヤ人のうち、収容所行きを免れたのは、5%未満に過ぎない。そして多くが、到着後即座にガス室に送られた<sup>(78)</sup>。ヒトラーのドイツによるユダヤ人殺戮計画によって、ギリシアは全ユダヤ人口のうち90%を失った<sup>(79)</sup>。1947年、サロニカには、2,000人に満たないユダヤ人しか残されていなかった<sup>(80)</sup>。

皮肉なことだが、アウシュビッツの強制収容所においてはじめて、サロニカのユダヤ人は、最終的に「ギリシア人」となった。収容所は、アシュケナジム系ユダヤ人が大半を占めた。アシュケナジム系ユダヤ人は、彼らの母語であるイディッシュ語も、支配者の母語であるドイツ語も理解しない、サロニカからのスファラディム系ユダヤ人を、劣等者と見なし、「よそ者」扱いた。この環境の中で、サロニカのユダヤ人は、「ギリシア人」としての結束を強めた。アシュケナジム系ユダヤ人も、収容所で働くドイツ人も、彼らを「ギリシア人」と見なした。ギリシア社会では「よそ者」の言葉とされたラディーノ語が、収容所では、「ギリシア人」の指標だった。やがて、サロニカ以外のギリシア地域から、ギリシア語を母語とするロマニオト系ユダヤ人が移送されてきた。サロニカのユダヤ人は、彼らをギリシア人同胞として迎えた。ドイツ人は、しばしば余興として、「ギリシア人」たちにギリシア語で歌うことを命じた。彼らは、ドイツ人がギリシア語を理解しないことをいいことに、唇に笑みをたたえつつ、捏造した歌詞でドイツ人を嘲ることで、密かな抵抗を試みることもあった<sup>(81)</sup>。

ギリシアが、ヨーロッパにおける、ユダヤ人コミュニティの中心のひとつと見なされたのは、バルカン戦争から第二次世界大戦までのわずか30年間である。その間、ギリシア国家の対応が、反ユダヤ的態度に終始したということはいできない。1920年の法律が示すように、ヴェニゼロス政府はユダヤ人もギリシア国民として受け入れ、彼らの宗教や文化的伝統に配慮する姿勢を見せた。しかし、ヴェニゼロス政権の政策は、自由民主主義を掲げながらも、一方では、強烈的なギリシア・ナショナリズムと結びついていた。そのヴェニゼロスが力をふるった戦間期において、サラニカのユダヤ人たちが、真の意味で、ギリシア国民と見なされることはなかった。ギリシア政府だけでなく、メディアやギリシア人一般が、ユダヤ人と自分たちの間に横たわる宗教的違いを超えて、市民権や国籍という概念を理解するまでには至らなかった。ギリシア人にとって、ユダヤ人は、正教キリスト教徒の自分たちとは異なる「よそ者」であり続けたのである。一方、ユダヤ人コミュニティは、ギリシアに併合されたのち、集団のありかたをめぐって分裂し、政府やギリシア人の反ユダヤ的言動や暴力に、有効に対処することができなかった。

戦間期のギリシア国家とユダヤ人コミュニティの両者には、オスマン帝国支配の名残が共通してみられる。宗教を基準として、個人やコミュニティのアイデンティティを判断するギリシア政府やギリシア社会一般の姿勢は、オスマン帝国時代の民族支配のあり方に通じる。ユダヤ人コミュニティに見られた、多様な意見の表出は、さまざまな文化や宗教、そして複数の民族集団を包摂し、多様性を基盤とした「帝国」という統治形態の下では、コミュニティの強さを示すものとして有効に機能したであろう。しかし、ひとつの民族が「主人」である「国民国家」の枠組の中で、マイノリティとしての彼らが分裂している状態は、積極的に未来志向的な成果をもたらすには、大きな足枷になった。

いずれにしても、ユダヤ人の扱いをめぐるギリシア国家の挑戦と、国民国家のマイノリティとしていかに生きるかというユダヤ人の挑戦は、未完に終わった。ナチ党のドイツが、ユダヤ人を一掃したあと、「バルカンのイェルサレム」サラニカは、ギリシア人の都市となったのである。

#### 《注》

- (1) ギリシア語ではテッサロニキ、トルコ語ではセラレーニク、ブルガリア語とセルビア語ではソルン、イタリア語ではサロニッコ、フランス語ではサロニーク、ラ

- ディーノ語ではセラニキと呼ばれる。本論では、英語による名称サロニカを使用する。なお、ギリシア語の名称テッサロニキは、古代マケドニア王国のアレクサンドロス大王の妹の名前に由来している。
- (2) オスマン帝国領マケドニアは、ギリシア、ブルガリア、セルビアの三国によって分割された。バルカン戦争の経過については以下を参照。Richard C. Hall, *The Balkan Wars 1912-1913: Prelude to the First World War* (London & New York: Routledge, 2000).
  - (3) Minna Rozen, "Jews and Greeks Remember Their Past: The Political Career of Tzevi Koretz (1933-43)," *Jewish Social Studies: History, Culture, Society* 12, No. 1 (2005): 159 n 104. この数値以外にも、ギリシア併合当時のユダヤ人人口として、7万人、8万5,000人から9万人という数値が挙げられている。Rena Molho, "The Jewish Community of Salonika and Its Incorporation into the Greek State 1912-19," *Middle Eastern Studies* 24, No. 4 (1988): 391, 400 n 6. サロニカのユダヤ人、ギリシア人、イスラーム教徒別人口を示した様々な統計の比較一覧 (1870-1919年) は以下を参照。Ρένα Μόλχο, *Οι Εβραίοι της Θεσσαλονίκης 1856-1919: Μία ιδιαίτερη κοινότητα* (Αθήνα: Θεμέλιο, 2001), 47 Πίνακας XII.
  - (4) ギリシア・ナショナリズムに基づく、非ギリシア語 — 特にウラヒ人 — 話者に対するギリシア国家のアプローチについては、拙稿「正教キリスト教世界と民族国家のはざままで — オスマン帝国領マケドニアのウラヒ人の言語と帰属意識」『歴史学研究』第873号 (2010年11月), 37-48, 73頁を参照。
  - (5) Katherine E. Fleming, *Greece: A Jewish History* (Princeton & Oxford: Princeton University Press, 2008), 8-10.
  - (6) *Ibid.*, 63.
  - (7) Mark Mazower, *Inside Hitler's Greece: The Experience of Occupation, 1941-44* (New Haven & London: Yale University Press, 1993), 238.
  - (8) Esther Benbassa and Aron Rodrigue, *Sephardi Jewry: A History of the Judeo-Spanish Community. 14th-20th Centuries* (Berkeley, Los Angeles, & London: University of California Press, 2000), 9.
  - (9) Molho, "Jewish Community," 392-393.
  - (10) Fleming, *Greece*, 67-68.
  - (11) 1897年にスイスのバーゼルで開催された第一回シオニスト会議で、シオニズム運動の統括組織として発足。1960年に世界シオニスト機構と改称した。詳細は以下を参照。Aharon Zwerghbaum, "Zionist Organization," in Fred Skolnik & Michael Berenbaum eds., *Encyclopaedia Judaica*, 2nd ed., Vol. 21 (Detroit: Macmillan Reference, 2007), 576-581.
  - (12) Fleming, *Greece*, 69.
  - (13) *Ibid.*, 69-70. サロニカのユダヤ人に先行して、オーストリアが、サロニカを国際社会の管理下の中立地域とする案を提示していた。オーストリアは、サロニカを国際管理下に置くことによって、平和裏にバルカン半島への自国の影響力を強めると同時に、経済的利益を維持することを意図していた。Molho, "Jewish Community," 392-393.

- (14) Fleming, *Greece*, 71.
- (15) 第一次世界大戦後の国際連盟のマイノリティ政策全般については以下を参照。  
Mark Mazower, "Minorities and the League of Nations in Interwar Europe." *Daedalus* 126, No. 2 (1997): 47-63.
- (16) Photini Constantopoulou and Thanos Veremis eds., *Documents on the History of the Greek Jews: Records from the Historical Archives of the Ministry of Foreign Affairs* (Athens: Kastaniotis, 1999), 103-110.
- (17) Fleming, *Greece*, 92.
- (18) 19世紀から20世紀はじめのギリシア・ナショナリズムの核となった政治思想。領土を拡張して、オスマン帝国領に残されたギリシア人を包摂し、歴史的にギリシア文化と伝統が優越していた地域を自国領とすることで、コンスタンティノープルを首都とする国家の建設が目指された。
- (19) Benbassa and Rodrigue. *Sephardi Jewry*, 136.
- (20) Constantopoulou and Veremis, *Documents on the History*, 31.
- (21) Mark Mazower, *Salonica, City of Ghosts: Christians, Muslims and Jews 1430-1950* (London: Harper Collins, 2004), 405.
- (22) *Ibid.*; Rozen, "Jews and Greeks," 133-134.
- (23) Rozen, "Jews and Greeks," 132.
- (24) Mazower, *Salonica*, 407. ネハマの具体的な活動は、Eyal Ginio, "'Learning the Beautiful Language of Homer': Judeo-Spanish Speaking Jews and the Greek Language and Culture between the Wars," *Jewish History* 16, No. 3 (2002): 251-252 を参照。
- (25) Rozen, "Jews and Greeks," 132.
- (26) *Ibid.*
- (27) *Ibid.*, 131.
- (28) Fleming, *Greece*, 97.
- (29) Aristotle A. Kallis, "The Jewish Community of Salonica under Siege: The Antisemitic Violence of the Summer of 1931," *Holocaust and Genocide Studies* 20, No. 1 (2006): 39.
- (30) Rozen, "Jews and Greeks," 132.
- (31) Ginio, "'Learning the Beautiful Language of Homer'," 243.
- (32) 1910年以降サロニカを離れるユダヤ人もいたが、その多くはフランス、イタリア、またはアメリカ合衆国に向かった。第二次世界大戦開戦までにサロニカから移民したユダヤ人は、2万人から2万5,000人にのぼるが、そのうちのせいぜい四分の一程度が、最終的にイギリス委任統治領パレスチナに定住した。Mazower, *Salonica*, 406. 1933年から1940年までにパレスチナに移住したユダヤ人総数のうち、ギリシアからのユダヤ人は1%以下である。Fleming, *Greece*, 106.
- (33) Benbassa and Rodrigue, *Sephardi Jewry*, 142. ローカルな枠組みの中で、ユダヤ民族としてのアイデンティティを保持し、その文化と伝統の再生を図ろうとする姿勢は、同時代の、オスマン帝国のユダヤ人コミュニティにも共通に見られた。Aron Rodrigue, *French Jews, Turkish Jews: The Alliance Israélite Uni-*

- verselle and the Politics of Jewish Schooling in Turkey, 1860-1925* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1990), 136.
- (34) Rozen, "Jews and Greeks," 133.
- (35) ヴェニゼロスの経歴と自由党政権の政策全般については以下を参照。Paschalis M. Kitromilides, ed., *Eleftherios Venizelos: The Trials of Statesmanship* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2006).
- (36) Steven Bowman, "Jews," in Richard Clogg ed., *Minorities in Greece: Aspects of a Plural Society* (London: Hurst & Company, 2002), 68.
- (37) Mazower, *Salonica*, 320-321; Fleming, *Greece*, 78.
- (38) Mazower, *Salonica*, 324.
- (39) Fleming, *Greece*, 77.
- (40) *Ibid.*, 79.
- (41) Mazower, *Salonica*, 408.
- (42) 1928年のギリシアの公式の統計によると、難民の総数は122万2,000人にのぼる。ただし、この統計以前に亡くなった難民の数も相当数にのぼると考えられる。同年のギリシアの総人口は620万人である。Justin McCarthy, *The Ottoman Peoples and the End of Empire* (London: Arnold, 2001), 160-161. ギリシア・トルコ戦争勃発の歴史的背景とその経過、および、戦後の両国の住民交換については以下を参照。Demetrios Th. Pentzopoulos, "The 1922-23 Exchange of Minorities and its Impact upon Greece" (PhD diss., Princeton University, 1959); Michael Llewellyn Smith, *Ionian Vision: Greece in Asia Minor 1919-1922* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2000).
- (43) Fleming, *Greece*, 87.
- (44) ギリシア領マケドニア全体における難民定住政策の実施とその影響については以下を参照。Elisabeth Kontogiorgi, *Population Exchange in Greek Macedonia: The Rural Settlement of Refugees 1922-1930* (Oxford: Clarendon Press, 2006).
- (45) Rozen, "Jews and Greeks," 131.
- (46) Fleming, *Greece*, 86. 1928年までには、サロニカの総人口23万6,000人のうち75%をギリシア人が占めたとする記述もある。Mazower, *Salonica*, 330.
- (47) Fleming, *Greece*, 85, 87; Mazower, *Salonica*, 408.
- (48) Fleming, *Greece*, 84.
- (49) *Ibid.*, 85; Mazower, *Salonica*, 408-409; Benbassa and Roderique, *Sephardi Jews*, 98-99.
- (50) Fleming, *Greece*, 95.
- (51) *Ibid.*, 85.
- (52) Kallis, "Jewish Community of Salonica," 42-43.
- (53) Fleming, *Greece*, 95.
- (54) Mazower, *Salonica*, 409-410.
- (55) Fragiski Abatzopoulou, "The Image of the Jew in the Literature of Salonica," in Peter Mackridge and Eleni Yannakakis eds., *Ourselves and Others: The Development of a Greek Macedonian Cultural Identity since 1912* (Oxford

- & New York: Berg, 1997), 222.
- (56) Fleming, *Greece*, 95. 『シオン賢者の議定書』については、以下を参照。Leon Poliakov, "Elders of Zion, Protocols of the Learned," in Michael Berenbaum and Fred Skolnik eds., *Encyclopaedia Judaica*, 2nd ed., Vol. 6 (Detroit: Macmillan Reference, 2007), 297.
- (57) Mazower, *Salonica*, 411.
- (58) Fleming, *Greece*, 96. 1934年、ギリシア共産党は、国境線の変更をとまなわない「全民族マイノリティの完全な民族的・政治的平等」を主張し、その方針を変更した。John S. Koliopoulos and Thanos Veremis, *Greece: The Modern Sequel from 1831 to the Present* (New York: New York University Press, 2002), 112-113, 134.
- (59) Fleming, *Greece*, 94; Mazower, *Salonica*, 413.
- (60) 紀元前2世紀のセレウコス朝に対するユダヤ人反乱の指導者ユダ・マカバイの名を冠した、ユダヤ人青年から構成されるユダヤ民族主義に基づいたスポーツ振興組織。パレスチナにおけるユダヤ人国家建設を目指すシオニズムと連動して、19世紀末以降、オスマン帝国や中央・東ヨーロッパ各地で結成された。1921年チェコスロヴァキアのカルスパートで、各地の組織を統合してマカバイ世界連合が設立された。詳細は以下を参照。Savior Menahem, "Maccabi World Union," in Fred Skolnik & Michael Berenbaum eds., *Encyclopaedia Judaica*, 2nd ed., Vol. 13 (Detroit: Macmillan Reference, 2007), 320-321; Diethelm Blecking, "Maccabi Movement," in Gershon David Hundert ed., *The YIVO Encyclopedia of Jews in Eastern Europe*, Vol. 1 (New Haven & London: Yale University Press, 2008), 1111-1112.
- (61) Mazower, *Salonica*, 411; Fleming, *Greece*, 97-98.
- (62) Fleming, *Greece*, 98.
- (63) *Ibid.*; Mazower, *Salonica*, 412.
- (64) Fleming, *Greece*, 99; Mazower, *Salonica*, 414.
- (65) Fleming, *Greece*, 99; Mazower, *Salonica*, 414.
- (66) コレツは、ドイツ出身のアシュケナジム系ユダヤ人で、サロニカのユダヤ人コミュニティとの間に、対立と確執が見られた。また、第二次世界大戦中、ドイツによる強制収容所へのサロニカのユダヤ人移送に、彼が関与した可能性の有無については議論がある。詳細は以下を参照。Rozen, "Jews and Greeks," 111-166.
- (67) Fleming, *Greece*, 102.
- (68) *Ibid.* 1928年のギリシアの統計によると、ナショナル/エスニック/宗教マイノリティの総数は38万4,942人で、この数値から正教キリスト教徒数を差し引くと、約25万人となる。そのうち最大のマイノリティは、約15万人のイスラーム教徒である。この統計では、スファルディム系ユダヤ人は6万3,000人と記録されている。George Th. Mavrogordatos, *Stillborn Republic: Social Coalitions and Party Strategies in Greece, 1922-1936* (Berkeley, Los Angeles & London: University of California Press, 1983), 227, Table 45.
- (69) Ginio, "Learning the Beautiful Language of Homer," 243.

- (70) Fleming, *Greece*, 100.
- (71) Gino, "Learning the Beautiful Language of Homer," 244.
- (72) Fleming, *Greece*, 93-94.
- (73) Gino, "Learning the Beautiful Language of Homer," 247.
- (74) Mazower, *Salonica*, 404.
- (75) *Ibid.*, 403-404.
- (76) Fleming, *Greece*, 93.
- (77) Mazower, *Salonica*, 417-419.
- (78) *Ibid.*, 442. 第二次大戦直前, ギリシア領内の全ユダヤ人の70%以上がサロニカに住んでいた。その他のユダヤ人はアテネ (3,500人), カヴァラ (2,000人), コルフ (2,000人), イオアニナ (1,950人), ドラマ (1,200人), ラリサ (1,175人), カストリア (900人), ヴォロス (882人) などに存在した。Constantopoulou and Veremis, *Documents on the History*, 34.
- (79) Mazower, *Inside Hitler's Greece*, 256.
- (80) *Ibid.*, 244.
- (81) K. E. Fleming, "The Stereotyped 'Greek Jew': From Auschwitz-Birkenau to Israeli Popular Culture," *Journal of Modern Greek Studies* 25 (2007): 20-26.

(ギリシア近現代史／市ヶ谷リベラルアーツセンター兼任講師)